

戸塚中学・高校&青少年の居場所

コミュニケーションの大切さ

〇目次

外国語学部 英語英文学科 3年 馬場成美

戸塚中学校・高校

『コミュニケーションの大切さ』
外国語学部 馬場成美
『学校ボランティアから 気づいた課題』
人間科学部 佐藤 嶺
『活動を始めてから1年』
法学部 栗田佳苗

青少年の居場所

『広い視野を持つこと』
人間科学部 榎本航太
『コミュニケーションを 生かして』
経済学部 阿部由希
『お互いの変化』
人間科学部 山下拓也
『「青少年の居場所」を通して』
法学部 八代麻央

2年生の後期から戸塚中学でのボランティア活動を始めて一年以上がたちました。土曜塾の雰囲気にも慣れ、ほかのボランティアの方や戸塚中学校の先生方とも積極的に会話をするようになってきました。私はこの土曜塾で2年生と3年生の英語と数学を担当しています。今年のボランティア活動では生徒の様子を見ながら学習を進めていき、生徒とのコミュニケーションを大切にするという目標を立てました。

戸塚中学の土曜塾は9:00~10:00、10:00~11:00までの二つに時間が分かれています。1時間目に担当しているのは2年生の男の子です。私は4月からこの男子生徒を担当しており、この生徒は1時間まじめに勉強しています。4月のころは男子生徒ということもあって何を話していいのかわからず、勉強のことしか話していませんでした。しかし、最近私は、まじめに毎回出席しているのに勉強のこと以外何も話さないで帰るのはもったいないなと感じるようになりました。その次の回から何かしら会話の話題を考えていき、勉強以外のことを話しかけてみようと考えました。

初めは部活のことや学校のことについて話しかけてみました。その後も始まる前や終わった後の時間に会話をする時間をとるようにしました。私自身会話を弾ませるのはあまり得意なほうではないので、初めのころは非常に苦労しました。しかし、回数を重ねるうちに、私も会話することに慣れていき、うれしいことに相手の男子生徒からも学校のことなど様々なことを話してくれるようになりました。今では部活や文化祭、進路のことなどを自分から話してくれるようになりました。私も初めのころは、何か話さないといけないと焦っていましたが、今では「テストどうだった」など自然と会話の内容が出てくるようになりました。その結果、土曜塾のボランティアに行くのがより楽しみになったように感じます。

学校の現場では生徒とのコミュニケーションが最も大切であると思います。しかし、自分が消極的な態度で接してしまうと、生徒のほうも歩み寄ってくれなくなるということをボランティアを通して感じました。また、教える側の不安や苦手意識は生徒にも伝わっているということを先輩に言われました。自分自身が楽しんで会話をしていると生徒も楽しむことはできないということがわかりました。土曜塾は勉強する場ですが、少しでも楽しんでもらえて、来てよかったと思ってもらえるような場を作っていきたいと考えています。

活動を始めてから1年

法学部 自治行政学科 2年 栗田佳苗

私は戸塚高校の定時制で活動を始めて11月でちょうど一年が経ちました。母校ということもあり、昨年度は妙に緊張していました。昨年度は月に1、2回、学び直しという授業で活動をしていましたが、今年度からは毎週の活動で、学び直しと三年生の習熟度別の英語の授業を担当しています。

昨年度は生徒と話をしたり、丸付けをしていただけでした。しかし、今年度は英語の授業のため授業の30分前からその日の授業の打ち合わせを他大学の学生と教科担任の先生とする機会もでき、授業の流れや具体的な動き方の指示もいただきます。そうすることで、徐々に授業の流れがつかめ、自分の中で次にどう動けばいいのかわかるようになりました。また、生徒からの急な質問にも対応できるようになりました。授業に必要なプリントの印刷を手伝ったり、授業の中で例を見せるために先生と簡単な会話をしたり、様々な新しい経験をしています。二学期になり生徒たちともだんだん打ち解け、挨拶だけだったのが一人一人との会話も少しずつ増えました。活動を始めたころは一部の生徒しか話しかけても返してくれず、プリントをやってくれないことも多かったのですが、今ではクラスの全員と会話できるようになりプリントも「わからないから教えて」と言ってもらえるようになりました。正直なところ、英語は免許取得予定の教科ではないですし、自分の中でも苦手な教科です。私だけの努力だけでなく強化担当の先生と一緒に活動している他大学の学生の方との協力があり、毎週とても良い活動ができています。

今年度の活動を通して、授業準備の大切さや先生同士の協力がとても大事だということを実感しました。一人が生徒に対してプリントをやったり集中するように指示していたら、もう一人は指示するのではなく少し会話をする、などといった役割分担も大切だと感じました。大学の授業だけでは学べない経験をすることができ、これからも活動に励みたいと思います。

「学校ボランティアから気づいた課題」

人間科学部 人間科学科 2年 佐藤 嶺

10月から学校ボランティアとして、戸塚中学校の土曜塾で活動をしています。初めてボランティアに参加したときは戸惑いばかりでしたが、徐々に慣れてきたと感じています。まだ回数は少ないですが、今までの学校ボランティア活動を通して、主に次のような二つの課題が今の私自身にあると感じています。

一つ目は、生徒の課題や性格などに応じて最善の指導方法を見極めることです。土曜塾に参加している生徒は、それぞれ多様な学習に取り組んでいます。私が担当する生徒には数学を教えることが多いのですが、数学では解答への過程が一つではない問いについて教えることがあります。このようなとき、生徒の立場から考えた解答方法を検討しなくてはいけないと感じています。しかし、生徒の理解度がどれくらいあるのかをしっかりと把握していないと、個々の生徒に合わせた指導はできません。直接的に生徒と関わり合い、その中で生徒にとって適切な指導方法を模索することが必要不可欠ではないかと感じました。そのため、担当している生徒にどこでつまづいてしまったのか、何を教えてほしいのかを尋ねることから意識して取り組むようにしています。このようにして、少数数の指導では一人ひとりの生徒の課題に合わせて指導していくことを大切にしていきたいと思います。

二つ目は、生徒の考える過程やその様子をよく観察することです。途中式やノートから、生徒がどのように考えたのか一緒に確認することは、正しいときは自信につながるような指導ができ、間違えたときはその点に絞って指導することができるといって点で少数数指導において効果的であると考えます。また、ノート等に限らず生徒のしぐさや表情にも目を向けていくことが今の私には大切だと思います。担当した生徒の一人が、分からないことがあると小刻みに私の顔を見るしぐさをするように感じました。私はこれを一つのサインとして捉えました。このような小さなしぐさがあったとき、どのような対応をすればよいのかを考えるようにしています。まずはこのようなサインにしっかり気づくことを今後の目標としたいです。

このボランティアを始めてまだ間もないです

が、同じボランティア先の先輩方の指導方法を見ることによって、新たな発見が得られているように感じています。今後も学校ボランティアに参加して実際の生徒と関わることで、自分の指導力で不足している点を発見して、それを補強していきたいと思います。土曜塾で指導できる時間は限られています。生徒に十分な指導をするためにも生徒との積極的なコミュニケーションと、生徒に合わせて学習課題に焦点を当てた活動を心掛けたいと考えています。今後の活動の中で今回挙げた課題を意識して取り組むことができるように努めたいです。



広い視野を持つこと

人間科学部 人間科学科 2年 榎本航太

青少年の居場所のバンド活動に、初めて参加した日から約半年がたちました。ようやく子どもたちに顔と名前を覚えてもらうことができ、毎回の活動ではまるで同学年の友達のように接してくれるようになりました。最近ではアニメの話、ゲームの話などをしているうちに私の方が影響を受け、実際にそのアニメを観てみたり、同じゲームを買ってみたりして彼らと同じ価値観を共有することを楽しんでいます。こうして活動に慣れてきたことにより心にゆとりができて、広い視野で活動を見ることができるようになりました。

現在、青少年の居場所のバンド活動に参加している学生は私一人だけであるため、基本的に毎回の活動で7～10人程度のすべての子どもたちを担当しています。そのため、当然ながら子どもたち一人ひとりを注意して見ていなければいけません。こういった状況で活動が続けている

ことで、自然と広い視野を身につけることができていないのではないかと思います。例えば、活動中に集中力が切れてゲームやカードで遊びだしてしまいそうな子がいたら、それが他の子の目につく前に注意すること。これは、活動中に一人が遊びだしてしまうと、他の子もつられて一緒に遊びだしてしまうからです。また、新曲の練習をしているときに弾けない、叩けないフレーズがある子に早めに声掛けをすること。これは子どもが「できない」と思うことで自信を無くしてしまうことを防ぐためです。他にも演奏中に一人の機材のトラブルがあった時は全体の流れを止めないようにするために機材の様子を見に行ったりすることも必要です。また担当の先生や保護者の方の指示を子どもに伝えるなど、小さなことでも気づいて行動できるようになったことは今までのこの活動を通して自分が成長できた部分だと感じます。しかし前回の活動では、保護者の方が活動を見に来られたときに椅子をすぐ用意することができず、他の保護者の方が用意してくださったことがあり、気づきが足りなかったと反省しました。

青少年の居場所のバンド活動を通して、責任感をもつことや子どもたちへの理解がより一層求められていると感じています。「始めたばかりだから分かりません」はもう通用しません。自分がやると決めた以上、これからはより一層の責任と覚悟をもって取り組みたいと思います。



コミュニケーションを活かして

経済学部 経済学科 4年 阿部由希

『青少年の居場所』として活動し始めて一年半以上が過ぎました。同じボランティアの仲間も増え、現在も楽しく活動を行っています。毎週火曜日と金曜日に、中丸小学校や神大寺地区センターでフットサルの活動を行っています。最近の活動で感じたことは、児童とのコミュニケーションが充実してきていることです。コミュニケーションと言っても言葉だけでなく、体を動かすことでお互いの思っていることや感じたことを伝え合うことも含まれると学びました。

小学生や中学生などとコミュニケーションをとるときに最も大事にしているのは、目をみて話すことです。何を言いたいのかを自分なりに考えて、話してくれている児童生徒に対して、聞く側の私も目を見て、しっかりと聞いているよという姿勢でコミュニケーションをとるように意識しています。そうすると、小学生の子たちが自ら話しかけてくれるようになりました。小学生や中学生などとのコミュニケーションが充実することで、新たに信頼関係が生まれると考えます。

教員資格認定試験の勉強などで活動に参加できないときが何度かありました。活動できる状態になり参加すると、児童から「この前なんで来なかったの?」や「○曜日は来る?」などと言われました。この会話から、私は児童生徒のなかでしっかりと認識されていると思いました。また、学校で起きたこと、サッカーやフットサルで教えてほしかったことなど、コミュニケーションをとる間で信頼関係が構築されていることを感じました。例えば、大人チームに小学6年生が混ざって試合をしたとき、その小学生が困っていたことがありました。いつも感じているプレーの質や速さが違ったからです。「まずはこの部分だけ意識してやってみよう」と声をかけたり、いいプレーをしたらほめたり、児童を鼓舞するような声かけを意識してみました。そうすると、少しずつ大人に負けじとイキイキとプレーするようになっていました。その日の終わりに、「あんな感じでやればいいの?」と聞かれ「うん。続けて行こう」と言う。「わかった。んじゃやってみる。」と笑顔になっていました。これは、ありがとうという言葉に代わる表現であると感じました。

『青少年の居場所』で活動できなかった時があったことで、自分が児童生徒にどう思われているのかを知ることができました。そうした関係を築けたのは、今までの積み重ねがあったからです。自分から積極的にコミュニケーションをとることで、お互いが分かりあい、良い関

係になれることを学びました。これからは、『青少年の居場所』で学んだことを学校現場でも活かしてよりよいコミュニケーションがとれるよう努力したいです。

お互いの変化

人間科学部 人間科学科 3年 山下拓也

私は今年度の10月から、横浜市中丸小学校で行われている「まる倶楽部」という総合型地域スポーツクラブでフットサルのボランティアを始めました。ボランティア活動は初めてで、どのように児童・生徒に話しかけていけば良いか、行動すれば良いか分かりませんでした。しかし、自分で積極的に児童・生徒に話しかけることを心がけて行動すると嬉しい反応が返ってくるがありました。

私は現在の児童・生徒は自分から意見を言うことがあまりないと考えていました。最初は、私が質問などをするとその質問には答えてくれましたが、児童・生徒から話しかけられることはありませんでした。話しかけてもらえないのは、まだ私がどういう人間なのか分からないからだと考えました。そこで私から積極的に話しかけるようにして、私がどういう人間なのか理解してもらい信頼関係を築くことができるようにしました。また、こちらに興味を示している児童・生徒に話しかけていきました。初めは、やはり警戒している様子で話しかけてくれることはありませんでした。しかし諦めずに行動していると、変化がありました。「もっとみんなでパスを繋いで攻めていきたい」、「この位置にボールをもらいに来てほしい」と生徒から意見を言うてくれたのです。とても嬉しい変化でした。

生徒から意見を言うてくれたことで、この生徒はどのように考えているのかが理解できたので、どのように話しかけていけば良いのか分かるようになりました。生徒と少し打ち解けられるようになったので、プレー中に私から声を出して場を盛り上げることもできるようになりました。まだ、フットサルに関す

ることしか話しかけられることはありません。しかしこの心構えは変えずに、積極的に行動して児童・生徒との信頼関係を築いて、様々な話ができるようにしていきたいです。また、ただがむしゃらに声をかけるだけではなく、何か狙いを持って話しかけていきたいです。私から行動することで、生徒の変化だけではなく、自分の変化にも気付くことができました。

このボランティアの経験は、これから教師になった時に活かせるものだと考えています。初めての学校や担任、授業などでは、この状況と似たものがあります。このような場面に直面した時には、この経験を存分に活かして生徒と関わっていきたいです。そしてこれからも、ボランティア活動を通して様々なことを多く経験し、吸収していきたいです。



「青少年の居場所」を通して

法学部 法律学科1年 八代麻央

「青少年の居場所」のフットサル・ボランティアにまだ数えるほどしか参加していません。「青少年の居場所」では主にフットサルを通して生徒たちとコミュニケーションをとっています。試合中だけではなく、試合前の準備や試合後の後片付けも生徒と一緒に行うので、話をするチャンスが沢山あります。フットサル・ボランティアでは、学校の授業内だけでは見ることのできない生徒の一面が見られると思いました。

私が活動をしていく中で見つけた目標は、生徒たちと関係性を築きながらコミュニケーションをとることです。試合中はもちろんチームメイトや友達との試合を見るときは生徒の顔は真剣そのものです。自分のミスを克服しようとしたり、試合を見ている中で新たなプレーの方法を学習できるからだと思います。一方では、準備や後片付けの時に声をかけてくれたり、笑顔でチームメイトと励ましあったりもしていました。まだまだ馴染めていない私に対しても、ゴールの準備の仕方を教えてくれました。また、試合を見ている際にも話しかけてくれたり、生徒とコミュニケーションを図るきっかけがいくつもありました。

フットサル・ボランティアはスポーツを真剣に楽しみながら様々な人とコミュニケーションを図り、自分を高めていくような雰囲気のある場所です。主な活動場所は小学校の体育館です。しかし、活動に参加しているのは小学生だけではなく中学生や高校生、地域にお住まいの社会人の方々、そして私たちのような学生がいます。年齢が異なれば、着眼点もそれぞれ異なります。社会人の方々は、生徒たちが怪我をしないので安全に試合ができるように声掛けを行っていました。私たち学生も自分たちの試合は楽しみながらも、安全に気を配ったプレーを心掛けています。先輩方は、生徒たちに見せても恥ずかしくないようにルールを守り、より多くのチームメイトにボールを回すことを意識していました。私にはまだできない行動や気遣いを今後吸収していきたいです。生徒たち自身にとってはフットサルを学び、人間関係を築いていく場所なのだと思います。

参加していく中での困ったことは、たまたま私の目についただけなのかもしれませんが、ゴールの片付けを大学生が中心に行っていたことです。小学生たちに声をかければもちろん手伝ってくれます。これから準備や後片付けもスポーツ活動の一環だということを学んでもらうためにも、積極的に声をかけていきたいです。最後に、活動が始まる前と終わった後に全員で円になり挨拶をするというものがありました。円になることで全員の顔と表情を見ることができるので、その習慣を大切にしてスポーツを通じて生徒たちと関わっていきたいです。



発行日：2015年2月14日

発行所：神大ユース・サポート・プロジェクト(JYSP)

TEL：045-481-5661(内線4352)

FAX：045-413-4154

E-mail：jysp-jimukyoku@kanagawa-u.ac.jp

URL：http://www.kanagawa-u.ac.jp/teacher_training_course/jysp/